



王一だより

令和3年2月号
北区立王子第一小学校
校長 荒木 康子

教育目標 ㊦仲良く助け合う子 ㊧身体をきたえ元気な子 ㊨よく考え最後までやりぬく子 ㊩親切で礼儀正しい子

冬来たりなば春遠からじ

校長 荒木 康子

一年で最も寒い時期だとされる大寒（1月20日）を過ぎ、2月の声を聞くと待ち遠しいのが暖かな春です。立春（今年は3日）間近となり、1年生がお世話をしている植木鉢のチューリップやクロッカス、2年生の水栽培のヒヤシンスの小さな芽が伸び始めています。校庭の梅のつぼみはまだ固そうですが、つぼみにほんのり紅色が見え始めています。

「冬来たりなば春遠からじ」ということわざには、「寒く厳しい冬が来たということは、暖かい春が目の前まで来ている。」という意味のほか、「つらい時期を乗り越えれば、やがて楽しい時期がやってくる。試練があれば、それだけ幸せが巡ってくる。」という意味があります。実に、今の時期と今の世の中の状況に重なる切なる願いでもあります。

子供たちは、この1年、行動の制約や生活の変化によく我慢し、適応に精一杯努めてきました。近頃の子供たちの姿から、10か月の学校生活であっても子供たちの成長は12か月分の成長に十分値すると感じられます。

6年生は、最高学年として、学校生活のあらゆる場面でリーダーとなり、期待に応える成長ぶりを見せ、活躍をしています。6年生一人一人から、残り少ない小学校生活の一日一日を大切に過ごしている様子が見受けられます。

そして、その6年生の姿を引き継ごうとしている5年生の子供たちにも、次のリーダーとしての期待に応えようとする意気込みの芽生えが感じられます。

また一方で、1年生の様子を見ますと、先生の話をしっかり聞き、真剣に授業に取り組んでいます。あどけなさの中にも自信溢れる言動が数多くみられるようになり、子供たちの成長した姿を感じ、とてもうれしく思う今日この頃です。

近頃、子供たちが「ありがとう」の一言を当たり前のように添えて生活する場面を多く見かけます。例えば、友達からプリントを渡されたとき、給食の配膳のとき、尋ねたことを教えてくれたとき、ほめてもらったとき等。確かに、ともに生活する中で、感謝の気持ちを伝える場面はたくさんあります。

当たり前のことかもしれませんが、小さな感謝の気持ちをお互いに素直に言葉で伝え合える関係を築いてきたことの証ともいえます。感謝の気持ちを伝えることは、お互いの喜びを生み、心を豊かに育てることにつながると考えます。私たちは、人から感謝されたとき、幸せな気持ちになります。感謝した側もまた幸せな気持ちになるところに、感謝の言葉を伝える大切な力があるように感じます。

幸せな気持ちは、待ちに待っている春の暖かさに似ていると思います。

立春は、「立春大吉」といって、一年で一番縁起のよい日。

この寒い冬を元気に乗り越え、希望に満ちた春を迎えられるよう願います。春はすぐそこです！

